

マルクス、スペンサー、デュルケームによる 社会的分業の分析—肯定的結果編

小 原 一 馬

Positive Consequences of Division of Labour

— Marx, Spencer, and Durkheim —

Kazuma KOHARA

序

「国富論」(Smith 1776)におけるアダム・スミスの古典的研究以降、社会的分業は、多くの著名な社会学者達の共通テーマとなってきた。こうした彼らの分析対象の共通性は、現在のわれわれにとって、彼らの全体的な理論的視角の相違点や共通点を明らかにする上で、最高の条件を与えてくれる。本稿においては、そうした分業についての古典的な理論の中でもカール・マルクス、ハーバート・スペンサー、エミール・デュルケームの分業に関する理論を取り上げ、彼らによる社会的分業発達の肯定的結果の分析の比較検討を行う。¹

本稿は小原(1997a), (1997b)とともに、マルクス・スペンサー・デュルケームの分業論のはじめの包括的な比較研究であり、またその小原(1997a)、小原(1997b)の補論的意味合いを持っている。近年、従来の「デュルケームの『社会分業論』(1893)は、スペンサーの分業論に特に対立するようなかたちで発達した」といったJones(1974)に代表されるような見方を批判し、スペンサーとデュルケームの分業論の類似性を指摘する研究 (Corning [1982]、Boudon et Bourricaud [1984]、Turner [1985]、Perrin [1995]) が発展を見せている。これらの研究は共通に、スペンサーを功利主義的個人主義、デュルケームを社会実在主義として分類するような従来の単純な見方を批判し、デュルケームのよってたつ機能主義的社会観そのものが、スペンサーらを経由してデュルケームに入ってきている可能性を示唆している。もっともBorlandi(1993)も指摘するように、デュルケーム自身は、こうした機能主義的考え方をコントの著作から直接学んだと主張しているのであるが、少なくとも、スペンサーが分業の個人に対する機能だけでなく社会的機能も強調しており、しかもデュルケームがスペンサーのそうした著作に通じていたのは事実である。しかしこれらの先行研究も、「スペンサーはデュルケーム同様機能主義者であり、個人に対する機能のみならず、その社会的機能も重要視している」ということをやっと触れる段階にとどまっており、例えば、デュルケームにおける分業の果たす機能の概念の変化や、デュルケームとスペンサーが考える社会的機能の共通点と違いなどにはほとんど言及していない。本稿では、このような先行研究をベースに、デュルケ

ームとスペンサーの考える分業の個人的機能・社会的機能の詳細な分析を、さらにマルクスによる分業の肯定的結果の分析と比較することにより、彼ら三人による社会的分業発展の肯定的結果の分析の、主要な共通点と相違点を明らかにすることができた。マルクス・スペンサー・デュルケームは、分業の影響について、彼らが認める現象のレベルでは、多くの点に関して共通している。しかしその現象に対する分析や評価になってくると相違が目立つようになる。しかし少なくとも評価に関しては、そうした違いのほとんどが、彼らの自由と分業（あるいは協調）との関係についての考え方の違いからきているといえる。これらが本稿の主なファインディングズである。以下、マルクスによる社会的分業発展の肯定的結果の分析の検討から始め、次にスペンサーとデュルケームの分業の機能に関する考え方の比較、結論部で三人の理論の比較検討を行う。

マルクスによる社会的分業発展の肯定的結果の分析

マルクスにとり、分業の発達はその止場に向けての重要なステップであった。拙稿(1997b)でみたように、マルクスにとって分業は人間性の疎外の源泉以外の何物でもない。ゆえにそれは未来の理想社会においては、廃棄されねばならないし、彼は実際廃棄できると考えた。このようにマルクスは、社会的分業発展の影響のその肯定的側面を、分業自身の発展的止場との関係でのみ捉えている。マルクスが考える社会的分業発展の主要な肯定的側面として四つのものを考えることができる。すなわち、社会構造の変化、生産力の発展、世界市場の発展と、世界市民化（コスモポリタニズム）、そして支配の脱神秘化である。この節ではこの四つの側面を順番に見ていこう。

さて、まず第一に社会構造の変化だが、これは階級構造の単純化と一般化を指す。すなわち、分業の発達にともなう資本主義の発達によって、数多くの階級利害に基づく数多くの階級——例えば地主、農奴、職人親方、職人などなど——が、「たがいに直接に対立する二大階級、ブルジョア階級とプロレタリアート階級」²へと、二極分化し収斂していく過程を指していく。良く知られているように、マルクスは、分業の発達にともなうこうした階級の二極分化と階級闘争の激化が、一時的にはプロレタリアートの疎外を深めながらも、プロレタリアートの勝利のもとに解決されることを信じていた。³

第二の側面は、生産力の発達である。生産力の発達は、いくつかの理由で疎外の廃棄のための必要条件となる。その理由の第一は、生産力の発達が上記の階級闘争の激化を導くことにある。

この「疎外」はもちろんだた二つの実践的な前提のもとでのみ廃棄されることができる。それが一つの堪えられぬ力、すなわちそれにむかって革命が行われるような力となるためには、それが人類の大衆をば全くの無産者としてうみだしていると同時に、それぞれ生産力の大きな上昇を前提とする「富と教養」との、現存世界に対する矛盾のかたちで生みだしていることが必要である。⁴

生産力の発達が必要となる第二の理由は、革命の後に、個人の欲求の満たされていないより以前の段階へと逆戻りすることを防ぐためにある。デュルケームとは異なり、マルクスは、

個人の欲求を疎外状態から解放し、しかもそれを満たすことが、生産力の拡大によって可能になると考えている。⁵ 上記の引用からマルクスは次のように続けている。

他方では、生産力のこのような発展は、次の点からも一つの絶対に必要な実践的前提である。というのは、この発展がなければただ欠乏だけが、一般化され、したがって窮乏とともにまたもや必要物のための争いがはじめられ、そして古い汚物がそっくり立ち直るに違いないからである。⁶

この生産力の発展は、第三の側面である世界市場の発展とコスモポリタニゼーションを支えるためにも必要となる。拙稿(1997a)でみたように、生産力の発達と広い意味での「交通・流通(Verkehr)」の発達とは、お互いに支えあいながら相互発展していく関係にあるとマルクスは考えている。⁷ この「交通」の発展は、世界市場の発展とコスモポリタニゼーションの動きをとまなう。この世界市場の発展とコスモポリタニゼーションは、生産力の発展を支えるためだけでなく、また、労働者の疎外の止揚のための革命が、全世界的現象となるためにも必要となる。上記の引用は次のように続けられる。

さらにまた、生産力のこの普遍的な発展とともに始めて、人間の普遍的な交通が成り立ち、したがってこれは一方では無産大衆の現象を全ての民族のうちに同時に生み出し(一般的競争)、これらの民族のいずれをも他の諸民族に依存させ、そして地方的な個人のかわりに世界史的な、すなわち経験的に普遍的な個人をおきかえたからである。このことがなければ(1)共産主義はただ地方的なものとしてしか存在できないだろう。(2)交通の諸力そのものは普遍的な、したがって堪えられぬ力としては発展できなかったし、いつまでも土着的・迷信的な境遇のままだったろう。そして(3)交通のあらゆる拡大は地方的な共産主義を廃棄してしまうだろう。⁸

最後の側面は、支配の脱神秘化である。社会構造の変化にとまなない、社会における主要な支配階級も、封建的地主階級からブルジョア階級へととってかわられる。マルクスはこの変化の過程で、階級支配の基礎が脱神秘化され、支配の本質的性格が貨幣の力によって暴かれることを指摘している。この支配階級の交代は、まず古い支配階級と新しい支配階級の対立として現れ、その対立は最終的に後者の勝利に終わる。

発展の現実的経過は、未完成で中途半端な私的所有の地主階級に対して、資本家階級、すなわち完成された私的所有の勝利を必然的にもたらすということである。一般的にあって、動くことは動かぬことに対して、公然たる自覚的な俗悪は、隠然たる無意識的なそれに対して、啓蒙主義を自認する倦むことを知らぬ機敏な利己主義は、ローカルで世才にたけ、無為実直で空想主義の、迷信に満ちた利己主義に対して、つまり金(かね)は私的所有のもう一つの形態に対して、否応なく勝利するはずだということなのである。⁹

この支配の脱神秘化は、社会理論においても、重商主義や重農主義の経済理論から、商品の価値の源泉を明らかにした、スミスらの国民経済学への変化を導く。商品の価値の源泉は、

金でも土地でもなく、労働であるというわけだ。

したがって、富の主体的本質を——私的所有のの内部で——発見したところの、この啓蒙された国民経済学の目には、私有財産を人間にとってただ対象的に過ぎぬ一つの存在物と見なす重商主義や貨幣学説の徒たちは、物質崇拜のフェティシストかカトリック信者に見える。エンゲルスはそれゆえに正当にもアダム・スミスを国民経済学のルターと呼んだ。¹⁰

もちろんマルクスはこうした文脈の中に、彼自身の経済理論を位置づけている(Marx 1843-5)。マルクスによれば、発達した分業のシステムは、そのシステムを支えるイデオロギーとしての国民経済学を発達させたのみならず、同時にそのシステムに内在する矛盾を止揚するマルクス主義的共産主義をうみだしたことになる。支配による分業の脱神祕化は、マルクス自身の実践を介して、分業の矛盾を止揚する現実の力になるのだ。

スペンサーとデュルケームの考える社会的分業の機能、その類似と相違

分業の存続・発展そのものには否定的な意味しか見出さなかったマルクスとは異なり、スペンサーとデュルケームはともに、分業そのものの持つ、社会や個人へ対しての積極的意義を認め、分業の発達を擁護した。その意味で、分業の自己崩壊の性質のみを肯定的に捉えるマルクスと、分業を本質的に良いものとするスペンサー・デュルケームのあいだには、分業発展の影響の肯定的側面について、決定的な意見の相違がある。一方、スペンサーとデュルケームの理論は、分業に、社会的連帯と経済的發展を促し、社会全体の生存能力を高める効果を認めるという点で、とても性質の似たところがある。このように、かなり似通ったスペンサーとデュルケームの理論も、細部を見れば、かなり違ったところも存在する。確かに両者とも、分業の分析において機能主義的な立場を取っており、ゆえに「社会の生き残り」のための分業の機能に、焦点を当ててはいるが、同じ「社会の生き残り」といっても、デュルケームは社会のとくにその道徳的秩序が、社会的連帯の強化を通じていかに生き残るかを問題にし、一方、スペンサーは（日常われわれが使うような意味での）個人の協調的集団としての「社会」の、経済發展を通しての生き残りを主に問題にしている。

本節では、まずこの比較的似通ったスペンサーとデュルケームによる分業発展の影響の肯定的側面の分析の、類似点・相違点を検討することにより、結論部におけるマルクスも加えた三人の理論の比較の土台にしたい。ここで検討していくべき点は次の二つに分けられる。

第一に、スペンサーとデュルケームはともに分業発展の影響の肯定的側面の分析に、機能主義的アプローチを行っている。しかしスペンサーは分業の機能を、個人と社会両方の保持のためのものとして別々に分析している。一方、デュルケームは、社会的機能だけに焦点を当てている。社会的機能に関していえば、両方が、社会は協調あるいは、連帯を必要とするかと仮定している。

第二に、スペンサーとデュルケームは共通に、社会における主要な協調（あるいは連帯）の種類が、分業の発達とともに、強制的なものから、自発的なものへと変化することを認めている。これはスペンサーの言葉でいえば、軍国主義的な社会から、産業型への社会の変化

であり、また社会間の関係も、闘争的で敵意あるものから、協調的なものへと変化すると彼らは共通に考えている。しかし、デュルケームにとって、こうした自由化が有意義なもの認められるのは、その自由を利用して新しいかたちの社会のモラルを創り出すためか、あるいは、全人類的な兄弟愛という理想のため、孤立した小さな社会の協調的統合に役立つかのどちらかの場合のみでしかない。一方、スペンサーにとって、自由は人間の幸福の源泉であるから、それ自体が有意義なものである。

スペンサーとデュルケームの機能主義的アプローチ

それでは第一の問題、すなわち機能主義的アプローチについて、スペンサーの立場から検討していこう。スペンサーは述べている。

組織がどのように立ち上がり、また発達していくかを理解するためには、その出発点及びそれ以降の点において、そこで満たされるべき欲求(need)というものを理解することが必要不可欠である。¹¹

ここで「欲求」という言葉で意味しているのは、マリノフスキーの意味での個人的「欲求」と、ラドクリフ＝ブラウンの意味での社会的「欲求」の両方である。スペンサーは分業の肯定的結果についても、こうした機能主義的観点から分析している。彼にとって、分業は何より協調の形態であり、この協調は個人的機能、社会的機能の双方を併せ持っていると考えられる。分業の発達は、社会を構成する部分間の異質性を高め、ゆえにそれは部分間の協調を必要不可欠のものとする。分業の発達により、その相互依存性は最終的には、「ある部分の活動と生存が、残りの部分の活動と生存に全面的に依存する」¹²という状態にまで発展するとスペンサーは考えているのである。さらに彼は、社会のうちに基本的に二種類の協調を見出す。「無意図的・自発的協調」と「意図的・強制的協調」である。前者の協調は、産業的組織において、後者の協調は政治的組織においてそれぞれ主流をなしているとされる。次の表を見て欲しい。

表1：二種類の協調と機能（スペンサー）

	社会的機能	個人的機能
無意図的協調	人口の確保（間接的結果）	よりよい生活（直接的目的）
意図的協調	社会防衛（直接的目的）	個人の自己保存（間接的目的）

典型的には、「無意図的・自発的協調」は「産業型社会」に、「意図的・強制的協調」は「軍国主義型社会」にそれぞれ見られる。表1に見られるように、前者は直接的には個人的機能を目指し、後者は基本的には社会的機能を目指して行われるが、結果的には、他方の種類の機能をも同時に満たしていると考えられる。

スペンサーは、少なくともどちらかの種類の協調が存在しない限り、「社会」とは呼び得ないと考えた。スペンサーは次のように述べている。「社会における単位が完全な独立状態から相互依存の状態に移るにしたがって、それらの単位の集合は社会と呼ぶにふさわしい存在となる」¹³ 言い換えれば、協調と相互依存が存在しない限り、ある集団は社会ではありえな

いことになる。

スペンサー同様、デュルケームもまた分業発展の影響の肯定的側面の分析に、機能主義的アプローチをとっている。例えば、デュルケームは『社会分業論』(1893)の第一巻を「分業の機能」と名づけ、この巻全体を使って、「集合意識」あるいは「分業」が、「有機体の欲求」に対する機能をどのように果たしているか説明している。¹⁴ この「欲求」とは、有機体としての社会の生存のための「欲求(必要物)」を指している。「機能」を定義してデュルケームは次のように述べる。

呼吸は、動物の肉体組織内に、その生命の維持に必要な気体などをとり入れることを機能とする、などといわれている。われわれが機能という言葉で理解するのは、この意味においてである。¹⁵

『社会分業論』のメインテーマは、「機械的連帯」を基礎とする社会から、「有機的連帯」を基礎とする社会への、「機能的代替」であるといっても過言ではあるまい。「機械的連帯」は、社会のメンバー間が持つ経験や思想の共通性によって可能となる社会的連帯であり、「有機的連帯」は分業による相互依存によって可能となる社会的連帯である。

実際、機械的連帯が消滅しつつあるのであるから、本来の社会生活は減少していくはずである。それとも、別個の連帯が消滅していく連帯にとって、漸次とってかわってゆかねばならない。このいずれか一方が選ばねばならないのである。…(しかし前者は選び得ない。なぜなら)社会進歩は、持続的分裂からなりたっているのではない(から)である。全くこれとは逆に、われわれが進化すれば進化するほど、社会は自己という感覚と統一性を発達させるのだ。それゆえに、確かにこの結果を起す何らかの別個の社会的連鎖が存在しているはずである。ところで、それは分業に由来する社会的連鎖以外のものではありえないのである。¹⁶

デュルケームの(現代社会学でいう)「機能的代替」というアイデアの含意は、社会は少なくとも一種類の社会的連帯を必要としているということである。つまり「有機的連帯」は、少なくとも部分的には、社会の欲求に答えて生まれてくるのである。このような観点は、筆者のいう「機能主義的アプローチ」に特有のものであり、そしてそれは、『社会分業論』以降もデュルケームの中心的方法論であり続けた。例えば、後期の中心的著作である『宗教生活の原初形態』(1912)でも、デュルケームは宗教を社会の欲求という観点から説明している。

(もしトーマスが)同時に神と社会との象徴であるとすれば、神と社会とは一つでないであろうか?…社会がその成員におけるは、神のその信者におけるようなものである。社会は…みずからに特有な目的を追及する。けれども、社会は、われわれの仲介によってのみ、これらの目的に達するのであるから、われわれの協力を(宗教的なかたちで)命法的に要求する。¹⁷

社会が社会足り得るために相互依存が必要だと考えるスペンサー同様、デュルケームもまた社会的連帯が社会にとって必要不可欠であると考えている。このような仮定の類似性から

も、彼らの機能主義的アプローチの共通性は際立ったものになっているといえよう。¹⁸

ところで、筆者の主張するデュルケームの機能主義的アプローチの一貫性に対する反論として、彼による分業の社会的機能の取り扱いの変化を指摘されるかもしれない。確かに比較的初期の著作である『社会分業論』において、デュルケームは分業の最も重要な機能は、相互依存の生成であり、それによって社会に有機的連帯が生まれると考えている。そこで、デュルケームは「分業の真の機能は二人または数人のあいだに連帯感をつくることである」とまで述べているのである。¹⁹

しかしその一方で、中期を代表するといわれる『自殺論』(1897)で、デュルケームは近代社会における社会的連帯の主要な源泉として、有機的連帯ではなく、「人格崇拜」による一種の機械的連帯を考えている。すなわちここでは、『社会分業論』で展開された、分業の発達による機械的連帯から有機的連帯への移行という議論は完全に放棄されているのである。しかし重要なことは、拙稿(1997a)で見たように、この「人格崇拜」による社会的連帯もまた、社会的分業の産物であると考えられていることだ。

よって、『社会分業論』『自殺論』のどちらの著作においても、(有機的連帯を形成するような)相互依存であろうと、(機械的連帯を形成する)新しいタイプの集合意識である「人格崇拜」であろうと、伝統的なタイプの集合意識による機械的連帯が弱まるにつれ、社会的欲求に応じて生まれてくると考えられていることには変わりはない。すなわち、デュルケームが考える分業の主要な社会的機能の種類は『社会分業論』と『自殺論』とで完全にかわってしまっているにも関わらず、デュルケームの分業に対する「機能主義的アプローチ」自体はかわっていないのである。

このようにデュルケームとスペンサーは機能主義的アプローチを共有する。しかしながら、彼らの機能の概念は多少異なっていることも確かである。まずスペンサーとは異なり、デュルケームは個人的機能を独立のものと考えず、社会的機能に従属するものとしている。デュルケームは「(個人の)幸福は(社会の)健全状態の指標である」と断言している。²⁰ すなわち社会的機能が満たされていけば、その社会のメンバーも幸福であるというのである。デュルケームにおける社会的機能の強調点もまた、スペンサーとは異なっている。スペンサーが、社会的機能を、おもに戦争や経済的競争における生き残りとの関係で考えているのに対し、デュルケームは、社会的統合や連帯との関係で社会的機能を主に考えている。スペンサーにとっては、社会的連帯は社会的協調を助け、個人の幸福や社会の拡大と生き残りに貢献する限りにおいて意味を成すに過ぎない。スペンサーが最も重要視するのは、社会の収容能力を高める経済的発展の機能である。それに対し、デュルケームは、分業による経済的発展は、間接的にアノミーを引き起こし、社会的連帯の達成を妨げる逆機能であると捉えているのである。²¹

スペンサーとデュルケームによる、分業による個人の自由化の分析

それでは次に、第二の問題、すなわち個人の自由化と、軍国主義型社会から産業型社会への転換の問題について、スペンサーとデュルケームの立場の比較検討を行っていこう。

さきに見たとおり、スペンサーは協調を、意図的・強制的協調と、無意図的・自発的協調の二種類に分類している。スペンサーによれば、産業化の発達、すなわち分業の発達にともなう、社会において主流をなす協調様式が意図的・強制的協調から無意図的・自発的協調へと変化する。²² この変化は、軍国主義型社会から、産業型社会への変換を意味している。短期的には、この変化の方向は幾度も逆転するとはいえ、長期的には、軍国主義型社会から産業型社会への方向で変化は進むとスペンサーは考えている。²³ 軍国主義型社会と産業型社会はそれぞれ、いわゆる理念型的概念であり、その典型的性質をまとめると次のような表になる。

表2：軍国主義型社会と産業型社会（スペンサー）²⁴

	軍国主義型社会	産業型社会
主要な活動	社会の保存と拡大のための協同的 防衛・攻撃	平和的な、個人的活動を通じての相 互の関わり
社会的協調の原則	強制的協調、命令の強制による統治、 活動の積極的・消極的規制	自発的協調、契約と構成の原則によ る消極的規制
国家と個人の関係	個人は国家の利益のために存在、自 由と財産と移動に制限	国家は個人の利益のために存在、個 人の自由。財産と移動に多少の制限
国家と他の組織の関係	全ての組織は公的、私的組織は排除 される	私的組織は広く認められる
国家の構造	中央集権化	分権化
社会的階層構造	地位・職業・住所の固定、地位の相統	地位・職業・住所の開放的柔軟性、地 位の移動
経済活動の種類	経済的独立と自給自足、小規模な貿 易と保護主義	経済的相互依存 大規模な自由主義貿易
評価される社会的・個人的性格	愛国心、勇氣、敬虔、忠実、従順、権威 への忠誠、規律	自立心、友愛、個性、獨創性、自由

スペンサーは、このような社会の産業化による個人の自由化に、最大の価値を認めている。スペンサーは、個人の幸福の源泉はその能力の活用にあると考え、その能力の活用のためには自由というものが必要不可欠であると考えているからである。²⁵

一方、デュルケームもやはり分業の発達による個人の自由の拡大を観察している。次の図を見て欲しい。

図1：分業と個人の自由化



拙稿(1997a)でみたように、分業の発展は、経済発展とそしてその結果としての欲望の解放を導く。そして同時に、分業はまた、集合意識の普遍化を通して、知性の解放をも促すのである。デュルケームの（アノミーにつながる）欲望の解放に対する否定的な態度とは対照的に、彼の知性の解放に対する態度ははるかに肯定的である。

『社会分業論』において、デュルケームは集合意識の普遍化が、反省的知性の発達と、伝統の自由検討を促すことについて述べている。

共通意識（集合意識）が一般的になればなるほど、それは個人的多様性に対してより多くの自由の天地を与える。神が物と人から遠ざかる時、神の活動はもはや常時的なものでなくなり、また一切のものに及ぶことはなくなる。きわめて種々様々に自由に適用されうる抽象的な諸規則以外には、確定的なものはなくなる。…（そうした状況で）ひとたび反省が目覚めるとこれを抑制することは容易ではない。この反省が強力になるとき、それはそれに指定された限界を越えて自生的に発展する。²⁶

デュルケームは、スペンサーと異なり、このような知的な自由の拡大それ自体に肯定的な価値を与えるわけではない。しかしこうした知的自由が、すでに力を失っている古い伝統的なモラルのかわりに、新しいモラルを再構築するうえで果たす役割を大きく評価している。『自殺論』で彼は次のように述べている。

一度確立された信仰が、事実の成り行きの中で崩れ去ってしまうと、もはやそれを人為的に再建することはできない。残されるのはただ、生活の中でわれわれの行為を導いてくれる反省作用だけとなる。ひとたび社会的本能が鈍ってしまうと、人々に残される唯一の案内人は知性だけとなり、人はこれによって倫理的意識の再建をはからなければならないということである。²⁷

デュルケームは、（スペンサーと異なり）個人の自由化の積極的な意義に関しては部分的にしか同意しないのに対し、その彼も、分業が可能とする社会間の統合については、スペンサーと全く同意見を述べている。

人類愛の理想が、ついには事実のうちに実現されるようになるということは、人間が遠い昔から抱懐していた夢である。諸民族は、戦争が国際関係の方でなくなるような状態を、諸社会相互の関係が諸個人相互間の関係において、すでに実現されているように、平和裡に規制されるような状態を、あらゆる人間が同一の事業に向かって協同し、同一の生活を営むような状態を祈り求めているのである。…ところで、分業の発展がなければ、より広大な諸社会は形成されえないことをわれわれは知っている。なぜなら、これらの社会は諸機能のより大きな専門化なくしては均衡状態を維持しえないからばかりでなく、また競争者達の数の上昇がこの結果を機械的に十分に作り出すからである。…それゆえに、次のような命題が公式化され得るであろう。すなわち「人類の四海同胞の理想は、分業が進歩する限りにおいてのみ、実現されうる。」²⁸

デュルケームが積極的な意義を認める、こうした社会関係の変化は、スペンサーのいう軍国主義型社会から産業型社会の変化にともなう社会関係の変化に完全に一致している。

結論

本稿では、マルクス・スペンサー・デュルケームによる、分業発展の肯定的影響の分析の比較検討を行った。

マルクスにとり、分業は人間の疎外の源泉に他ならず、分業の自己崩壊は、分業発展がもたらす結果のうちの、唯一の肯定的なものである。この自己崩壊のうちに、われわれは四つの側面を認めることができた。すなわち社会構造の変化、生産力の発展、世界市場の発展と、世界市民化（コスモポリタニゼーション）、そして支配の脱神秘化である。

一方、スペンサーとデュルケームはともに、分業の存続と発展自身に、いくつかの肯定的な影響を認めている。また、彼らは分業の肯定的な結果の分析に、機能主義的なアプローチをとっていることでも良く似ている。しかしまた、彼らは次の二点において、異なっている。(a)デュルケームが、個人的機能の社会的機能の従属を前提として、社会的機能のみに分析の焦点を当てているのに対し、スペンサーは社会的機能と個人的機能の双方を別々に考察している。(b)社会的機能に関し、スペンサーが、経済的發展を通じての、個人の集団としての社会の存続を重視しているのに対し、デュルケームは、社会的連帯の強化を通しての、社会の特に道徳的秩序の存続を重視している。

マルクスもまた、スペンサーと理由は違うが、分業の発達による経済發展を分業の肯定的影響と考えている点で、スペンサーとともに、デュルケームと対立している。デュルケームは、経済發展をアノミーの間接的原因として否定的に捉え、マルクスと（スペンサーと立場の近い）国民経済学とともに批判している。²⁹ またマルクスは、スペンサー・デュルケームとは反対に、分業が、社会的連帯の強化どころか、階級間の対立を激化させる原因と考え、その階級対立の激化が階級そのものの廃棄を導くという理由で分業の發展を支持している。もっともマルクスも、スペンサー・デュルケーム同様、分業が社会のメンバーの相互依存を高めることを指摘しているが、この相互依存そのものが、人々の疎外であるとして、否定的な評価を下している。方法論に関していえば、弁証法的發展を理論の根底に据えるマルクスは、機能主義的なスペンサー・デュルケームの理論と根本的に異なっている。

さらに、デュルケームとスペンサーは、分業による個人の自由の拡大を認める点においても似ているが、個人の自由そのものに最高の価値を認めるスペンサーと異なり、デュルケームは、自由のうち、とくに知的な自由だけを、新しいモラルの建設に役に立つという理由で支持している。

この点に関しても、マルクスとの比較が可能である。分業の發展は、人々を強制的な協調から解き放つものとして支持するスペンサーとは、正反対に、マルクスにとっては、分業は人々をいっそう相互依存させ、不自由にするものである。一方、スペンサーは、（マルクスが共産主義への移行段階として考える）社会主義こそは、軍国主義への逆行であり、個人の自由を抑圧するものだと非難している。³⁰ しかし、分業の發展が、人間の知的な解放に役立つという点においては、三者ともに共通している。

彼ら三人はまた、分業の発達が社会間の統合を可能にするということに関しては、全員意見が一致し、そのことを肯定的に捉えていることでも等しい。ここまでのところを表にして

まとめておこう。

表3: 分業の肯定的結果

	マルクス	スペンサー	デュルケーム
分業そのものが良い効果をもたらす	×	○	○
社会的機能と個人的機能とは別々に分析する	×	○	×
分業がもたらす個人間の相互依存は、分業の肯定的機能である	×	○	○
経済的發展は、分業の主要な機能である		○	×
社会的連帯は、分業の主要な機能である		×	○
本質的に、分業は個人を解放する	×	○	○
そしてこの解放は肯定的に捉えられる		○	△
しかし少なくとも分業による知的な解放肯定的に捉えられる	○	○	○
分業は孤立していた複数の社会を統合し、それは肯定的に捉えられる	○	○	○

ここから結論として言えることは、まず、ほとんど全く違うように見える理論を展開しているようマルクス・スペンサー・デュルケームの三人が次のような現象を共通に認めていたということである。

- 1.分業は個人間の相互依存を導く。
- 2.分業は経済發展を導く。
- 3.分業は知的な解放を導く。
- 4.分業はかつて孤立していた複数の社会を統合させる。

しかし、これらの現象のうち、1と2に対する彼らの分析と評価は、大きく異なってきた。そして少なくとも評価に関していえば、そうした違いのかなりの部分は、彼らの自由と分業（あるいは協調）との関係についての考え方の違いからきているのである。例えば上記の1に関していえば、マルクスはそれを否定的に、スペンサーはほぼ中性的に、そしてデュルケームは肯定的に評価する。2に関しては、マルクスとスペンサーは肯定的に、デュルケームは否定的に捉える。単純な違いではあるが、この違いだけで、彼らの分業に関する理論の違いのかなりの部分が説明されるのである。

（ 註 ）

- 1 分業の原因、及び分業の否定的結果に関するスミス・マルクス・スペンサー・デュルケームの理論の分析については、拙稿(1997a)(1997b)を参照。
- 2 Marx and Engels 1848 邦訳 4 0 頁
- 3 同 5 6 頁
- 4 同 4 6 頁（訳に変更あり）
- 5 この違いは、分業發展の否定的結果に関する、デュルケームとマルクスの考え方の違いの一つの源泉となっている。拙稿(1997b)を参照。
- 6 Marx and Engels 1848 邦訳 4 6 頁
- 7 交通の發達以外にも、人口の拡大と集中とが、生産力の拡大とのあいだにポジティブ・フィードバックのループを形成しているとマルクスは考えている。拙稿(1997a)を参照。
- 8 同 4 6 ~ 4 7 頁
- 9 Marx 1843-5 邦訳 4 4 9 頁（訳は変えてある）
- 10 同 4 5 1 頁（訳は変えてある）
- 11 Spencer 1896 p.3
- 12 Spencer 1860 p.57
- 13 Spencer 1876 p. 185
- 14 Durkheim 1893 邦訳（上）95頁（訳は変えてある）

- 15 同上 (強調引用者)
- 16 同 邦訳 (上) 285頁 (訳は変えてある)
- 17 Durkheim 1912 邦訳 (上) 373～374頁
- 18 デュルケームはスペンサーのような、協調を社会の必要条件とする考え方を根拠のないドグマだとして退けている(Durkheim 1895)。しかし、デュルケーム自身、社会的連帯が社会の必要条件である必然性を示すことができなかったという点で、スペンサーとかわらない。
- 19 Durkheim 1893 邦訳 106頁
- 20 同 (下) 29頁
- 21 『社会分業論』におけるデュルケームの分業による経済発展という効果の取り扱い、未成熟であり、矛盾を抱えている。そこで彼は、「われわれが専門化するの、より大いに生産するためではなく、われわれに与えられた新しい生存条件のもとにおいて、生活しうるためである」(Durkheim 1893 邦訳 (下) 76頁)と述べている。(スペンサーが理解し)デュルケームが理解していないのは、経済的な生産の拡大こそが、(物理的な)人口の集中状況においてより多くの人口が「生活しうる」ようになる条件となっているということである。デュルケームの議論は、人口集中が、彼のいう動的密度の拡大によって達成されるときにしか当てはまらない。一方、『自殺論』では、議論を集合意識による連帯だけに絞ることによって、彼は経済的発展のアノミー生成の逆機能という一貫した立場を取ることに成功している。このような分業の否定的結果については、拙稿(1997b)を参照。
- 22 Spencer 1896 p. 193
- 23 同 p. 600
- 24 Spencer 1876 vol. I chp.10, vol. II chp. 17-18 より。Smelser 1968から転載
- 25 Spencer 1851 p. 15
- 26 Durkheim 1893 邦訳 (下) 99～100頁
- 27 Durkheim 1897 邦訳 195頁 (訳は変えてある)
- 28 Durkheim 1893 邦訳 (下) 291～293頁
- 29 Durkheim 1897 邦訳 315頁 拙稿(1997b)も参照。
- 30 Spencer 1896 p. 592

文献

- Alexander, J. 1982 *Theoretical Logic in Sociology II*. Berkeley: University of California Press
- Bateson, G. 1972 *Steps to an Ecology of Mind*. New York: Ballantine Books (『精神の生態学』佐藤良明訳、思索社、一九九〇年)
- Borlandi, M. 1993 Durkheim Lecteur de Spencer. *Division du Travail et Lien Social*: 67-109
- Boudon, R. and Bourricaud, F. 1984 Herbert Spencer et L'Oubrié. *Revue Française de Sociologie* 25: 343-351
- Corning P. 1982 Durkheim and Spencer. *The British Journal of Sociology* 33: 359-382
- Camic, C. 1989 Structure After 50 Years. *American Journal of Sociology* 95: 38-107
- Coser, L. 1971 *Masters of Sociological Thought*. Orlando: Florida: Harcourt Brace Jovanovich
- Durkheim, E. [1893] 1926 *De la Division du Travail Sociale*. Paris: Alcan (『社会分業論』(上・下) 井伊玄太郎訳、講談社学術文庫、一九八九年)
- _____. [1895]1919 *Les Règles de la Méthode Sociologique*. Paris: Alcan
- _____. [1897] 1960 *Le Suicide*. Paris: Presses Universitaires de France (『自殺論』、宮島喬訳、中公文庫、一九八五年)
- _____. 1897 *Essais sur la Conception Materialiste de l'Histoire*. *Revue Philosophique* 44: 645-651
- _____. [1912] 1960 *Les Formes Élémentaires de la Vie Religieuse*. Paris: PUF (『宗教生活の原初形態 (上・下)』、古野清人訳、岩波文庫、一九四二年)
- Engels, F. [1890] 1972 Letter to Joseph Bloch in Marx, K and Engels, F. *The Marx-Engels Reader*. New York: Norton :760-5
- Fisher, S. 1993 Economic Development. *Journal of Developing Societies*: 53-66
- Giddens, A. 1971 *Capitalism & Modern Social Theory*. Cambridge: Cambridge University Press (『資本主義と近代社会理論』犬塚先訳、研究社、一九七四年)
- Heredia, R. 1986 Transition and Transformation. *Sociological Bulletin* 35: 29-43
- Hughes, J., Martin, P., Sharrock, W. 1995 *Understanding Classical Sociology*. London: Sage
- Jones, R. 1974 Durkheim's Response to Spencer. *The Sociological Quarterly* 15: 341-358

小原：マルクス、スペンサー、デュルケームによる社会的分業の分析-肯定的結果編

- Knapp, P. 1986 Hegel's Universal in Marx, Durkheim and Weber. *Sociological Forum*: 586-609
- 小原一馬 1997a 「スミス、マルクス、スペンサー、デュルケームによる社会的分業の分析——原因編」(未発表)
- _____. 1997b 「マルクス、スペンサー、デュルケームによる社会的分業の分析——否定的結果編」(未発表)
- Levine D. 1995 *Visions of the Sociological Tradition*. Chicago: University of Chicago Press
- Marx, K [1843-45] 1932 *Ökonomische-Philosophische Manuskripte aus dem Jahre Karl Marx-Friedrich Engels historisch-kritische Gesamtausgabe 1-3*. Berlin:Marx-Engels Verlag (「1844年の経済学・哲学手稿」 【マルクス・エンゲルス全集 4 0 巻】 大内兵衛、細川嘉六監訳、大月書店、一九七五年)
- _____. [1851] 1922 *Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte*. Berlin:Dietz (「ルイ・ボナパルトのブリュメールー八日」 植村邦彦訳、太田出版、一九九六年)
- Marx, K and Engels, F. [1846] 1933 *Die Deutsche Ideologie in Karl Marx-Friedrich Engels Gesamtausgabe 1-5*. Moskau: Verlagsgenossenschaft Ausländischer Arbeiter in der UdSSR (「ドイツ・イデオロギー」 古在由重訳、岩波文庫、一九五六年)
- _____. [1848] 1932 *Das Communistische Manifest in Karl Marx-Friedrich Engels historisch-kritische Gesamtausgabe 1-6*. Berlin :Marx-Engels Verlag (「共産党宣言」 大内兵衛・向坂逸郎訳、岩波文庫、一九五一年)
- _____. 1972 *The Marx-Engels Reader*. New York: Norton
- Morrison, K. 1995 *Marx, Durkheim, Weber*. London: Sage
- Parsons, T. [1937] 1968 *The Structure of Social Action*. New York: The Free Press. (「社会的行為の構造 (1~5)」 稲上毅・厚東洋輔訳、木鐸社、一九七四~八九年)
- Peel, J. 1972 Introduction in *On Social Evolution*. Chicago: University of Chicago Press
- Perrin R. 1975 Durkheim's Misrepresentation of Spencer *The Sociological Quarterly* 16: 544-550
- _____. 1995 Emil Durkheim's Division of Labour and the Shadow of Herbert Spencer. *The Sociological Quarterly* 36: 791-808
- Smelser N. 1968 *Essays in Sociological Explanation*. Englewood Cliffs: Prentice-Hall
- Smith, A. [1776] 1976 *The Wealth of Nations*. Chicago: University of Chicago Press (「国富論 1~3」 大河内一男監訳、中公文庫、一九七八年)
- Spencer, H. [1851] The First Principles of Ethics (*Social Statics* の部分) in *On Social Evolution*. Chicago: University of Chicago Press: 14-16
- _____. [1860] 1972 The Social Organism in *On Social Evolution*. Chicago: University of Chicago Press: 53-70
- _____. [1876a] 1972 Political Institutions (*The Principles of Sociology II* の部分) in *On Social Evolution*. Chicago: University of Chicago Press: 185-205
- _____. 1876b *The Principles of Sociology I and II*. London: Williams and Norgate
- _____. [1896] 1975 *The Principles of Sociology III*. Westport Con.: Green Wood Press
- Turner J. 1984 Durkheim's and Spencer's Principles of Social Organization. *Sociological Perspectives* 27: 21-32